

創作少年少女小説

ひ
陽は夜のぼる

山下 喬子



創作少年少女小説

陽は夜のぼる

下喬子

之日本社



三
工

NDC 913

著者の了解により検印省略

創作少年少女小説

^ひ
陽は夜のぼる

やました きょうこ
山下 喬子

実業之日本社

1971年

264ページ

21.5cm

本文9ポ活字使用

小学校上級～中学生むき

^ひ
陽は夜のぼる

1971年7月15日 初版発行

著者 山下喬子

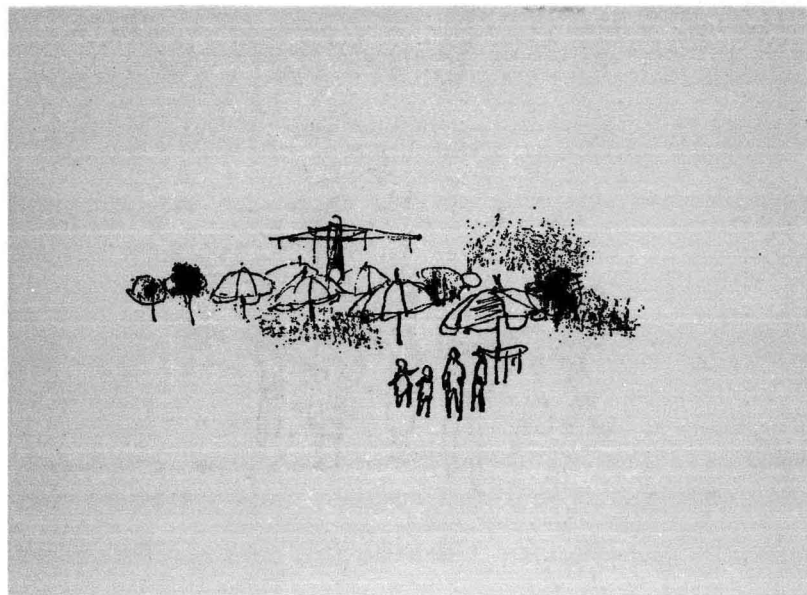
発行者 増田義彦

印刷所 株式会社 佐藤印刷所

発行所 株式会社 実業之日本社

〔104〕 東京都中央区銀座1-3-9

TEL (562)4311(大代) 振替東京326



もくじ

第一章

家出少年……………5

非行グループ……………10

刑事?!……………19

中学の教師……………24

たいせつな名刺……………28

サブのなみだ……………33

老人と海……………38

サブの身の上(一)……………42

サブの身の上(二)……………48

わかれ……………54

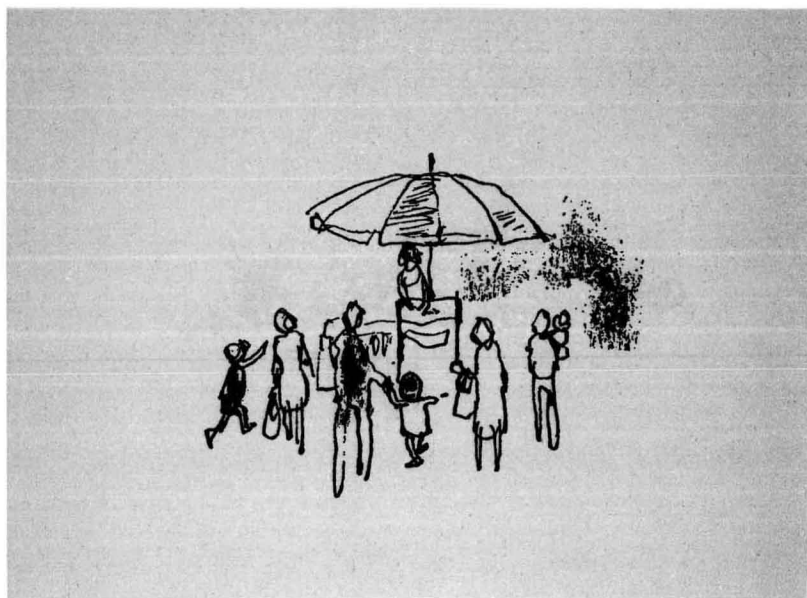
第二章

川むこうの八百屋……………60

クリーム色の校舎……………65

夜の同級生……………70

給食パンのゆくえ……………74



第三章

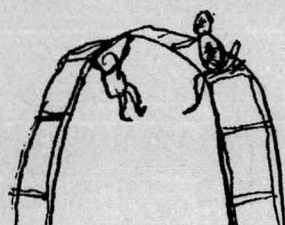
サプのつくえ	80
うらないは？	84
暗い予感 よかん	89
自己嫌悪 じこけんお	95

荒川の土手あらかわ

さゆりと妹	109
あいぼうのキツちゃん	114
制服の詩	118
親と子の関係	124
みなし子がいつぱい	132
キツちゃんの身の上	137

第四章

秋の遠足	152
砂浜 すなはま のおいなりさん	158
貝 はい がらの帆船 せんぱん	164



第五章

一郎をさがしに……………	170
洞窟 どうくつ の声……………	176
サブとのめぐりあい……………	182
砂浜 すなはま の足あと……………	187
早坂 はやさか 先生の過去 かこ ……………	194
戦争孤児 こじ ……………	198
第五章	
ねむれない夜……………	205
ふたりの行進……………	213
貴重なラブレター きちよう ……………	222
クリスマス・プレゼント……………	227
三郎 さぶろう の手紙……………	231
自転車と手ぶくろ……………	237
意外な訪問者……………	245
イチロの話……………	251
太陽をひとつに……………	256

■この本の絵をかいた人■

中山 正美

一九一四年宮崎県小林市生まれ。川端画学校で油絵を学ぶ。おもに子どもの本のさし絵の世界で活躍中。

第一章

1 家出少年

空の高みから、おびやかすようなうなり声をたてて、連日、砂じんをまきあげていた風がさつたと思ったら、雨がやってきた。

春雨は陰気に、まるで梅雨のまえぶれのようなふりかたをした。もう、三日もつづいている。

椿賢太は、カビのはえそうなうすいふとんにくるまつて、じっと天井をにらんでいた。雨が頭の中で音をたてている。

（あの村にも雨がふっているだろうか。）

ふっと、そう思った。すると、賢太のものういひとみのおくに、ひとすじの光が走った。

東京ではさくらもちつてしまったが、東北の盤梯山のふもとにある賢太の村では、さくらはこれからなのだ。なにかこう、胸をしめつけられる。

賢太は、はずみをつけておきあがると、窓ガラスにびたりと顔をよせた。けれど、雨滴の走る窓ガラスのむこうがわには、とりすました東京の家いえの屋根のかさなりが、無愛想につづいているだけであった。

賢太はくちびるをつきだした。それからかみしめた。

（山のあなたの空とおく、幸い住むと人のいう、か。なんだ、ブッセだかハッセだか知らないが、ひとを誘惑す

るような文句をならべやがって、フン。

賢太は、カーリッブッセにやつあたりした。

そうだ。たしかに、賢太が家出を決行し、山のあなたの東京へやってきたのは、東京になにかいいことがあり
そんな期待をいだいた、ということも、その一つである。

はやいものだ。家出をし、東京へきてからもう一ヵ月以上もたつ。

（ああ、故郷の中学のやつら、二年に進級したんだなあ。それなのに、おれは……。）

ため息とともに、あらい音をたてて、ふたたびふとんにひっくりかえった。安普請のアパートのへやがゆれた
ちぢめていた足を、ぐい、とのばすと、へやのすみのつくえにふれた。小型のすわりづくえ。しかし、これは
賢太のものではない。このへやの住人、賢太の兄貴ぶんのサブの財産である。

かべぎわのくぎに、ズボンやシャツがだらしなくぶらさがっているのだが、それだって、みなサブのものだ。

賢太はサブと同居している、といえはきこえはいいのだが、実のところ、居候のみぶんである。

つくえはもっぱら食卓の代用品に使われていたが、サブは、そのつくえの上で手紙を書いているときもある。

賢太は、サブが一週間に一度のわりあい、つくえにむかい、びんせんをひろげているのを見てきた。背をまる
め、しきりにペンを走らせているサブのすがたには、なにか必死なものがあって、まるで、受験生のようなしん
けんさが見えた。

（子どもみたいだな。）

と、賢太はそのとき思ったものだ。いつもの、やけっぱちでひややかなものは、みじんも感じられなかった。

サブは、二十歳となんか月か、だといった。

賢太は、目をとじたまま、足の先でつくえをまさぐった。つくえのかたい木の感触が、す足の指先から伝わってきて、それは、じーんと胸のほうにまではいあがる。すると、まぶたのうらに、つくえにむかっている賢太自身のすがたがうかんだ。夜おそくまでつくえにかじりついていた、中学一年のあのころの賢太が――。
(ついこのあいだのことだったのに。)

胸のおくが、きゅつと鳴った。ひどく感傷的な気分になる。

思い出というものは、うつかりすると、ずるずるといもづる式に、たぐりよせられてくるから、しまつがわるい。賢太はなきたくなかった。

そのとき、足音がしてドアがあいた。サブを先頭に、なかまのイチロやター坊が、そうぞうしくはいつてきたのだった。

幸か不幸か、賢太の感傷は中断された。

「おい、ナマケモノ、おきろ。」

まず、イチロがどなった。

入口でかきのしずくを、あらっほくきる。しずくが、賢太の顔にまでとんだ。あわててはねおきると、

「ぐあいがあるいんなら、ねてろ。」

サブがいった。いたわるようないかただった。

けさ、賢太もサブとでかけるはずだったのだが、頭痛がする、とうったえると、

「かせだな。これのんでねてな。」

と、緑色の錠剤を三つほどくれた。くすりがきいたのか、ぐっすりねておきると、頭痛はおさまっていた。

「もう、なおったよ。」

賢太は小声でいった。

「フン、仮病じゃないか。」

イチロが、口をとがらせる。彼は、しんまいの賢太が、兄貴のサブと同居し、どうやらサブに気にいられてい
るようなのが、不満らしい。

賢太より一つ年上だ、というから、イチロこと、戸口市郎は中学三年生のはずだ。けれど、彼も学校にいつて
いない、という。

ター坊は十七歳だった。高校二年か三年の年ごろなのだが、知能はひくく、たえずおちつかなく、おびえたよ
うな目をしていた。

三人が、まるくなつてすわると、賢太もへやのすみに、ひざをそろえてすわった。それから上目を使って、
車坐になった三人をうかがった。

サブたちは、「仕事」にいったのだ。

（きょうはもうけがあつたかな。）

まず、サブがズボンのポケットから、さいふをひっぱりだした。皮製の、見るからに上等なしろもの。つづい
て、ター坊が、小型のボストンバッグの中から、カメラを。イチロが、新聞紙にくるんだものをとりだすと、し
やれたハンドバッグだった。

さいふやバッグをさかさにつて、中味をぶちまけると、札や小銭や、その他、女の持物がちらばった。

「きょうはしけてるな。こう雨つづきだと、かせぎのほうも、しめっぽいや。」



サブは、はきすてるようにいつてから、

「ケン、おまえ、腹がすいたろ。カツどんでもとってやろうか。」

賢太のほうにわらって見せた。すると、カミソリみたいな光りかたをするサブの目に、ひどくやわらかなかけがさした。

2 非行グループ

椿賢太が、サブこと、滝田三郎をボスとする非行グループの一味にまきこまれたのは、東北の小さな村から家出をしてきた賢太が、上野駅におりた直後である。

はじめて見る東京、その北のげんかんともいえる上野駅の人ごみの中に、列車からおり立った賢太は、しばらく、ほんやりつつ立っていた。

家出は、たしかに冒険だった。叔母の金をくすねて、きつぷを買ったのこりは、もういくらもない。

おされるようにして改札口をでたとき、賢太の目に、思いがけない光景がとびこんできた。

改札口からすこしはなれた場所で、赤電話をかけているわかい女に、びたりとくつついている、これもわかい男。と、男の指がすばやく動いて、女のうでにぶらさがっているハンドバックから、さいふをぬきとった。女は夢中で受話機にかじりついているから、気がつかない。

スリだ！

賢太は息をのんだ。全身がこわばった。それなのに、目はすいついたように、男の指からはなれない。

賢太の視線を感じたのか、ふっと男はふりかえった。その目が、賢太を射すくめるように光った。と、なにげないそぶり、女からはなれると、その男は、もうおおいかぶさるように、賢太を見おろしていた。ひどくすばしこい動作だ。

「見たな。」

と、男はいった。賢太の頭に血がのぼった。どきどきする。

「見たな。」

男はふたたびいった。賢太は、機械じかけの人形のように、うなずいた。

「きな。」

うでをひっぱられ、歩き出したのも夢うつつみたいだった。頭が恐怖でしびれている。気がつく、たばこのけむりや、たべもののにおいのたちこめた食堂の一隅に、男とむきあつてこしをおろしていた。

いつのまに注文したのか、賢太のまえに、カレーライスのさらがはこばれてきた。

「たべな。」

男が、あごをしゃくった。

賢太は、思わずつばをのみこんでから、上目づかいに男を見た。男は、そっぽをむいてたばこをすっている。おずおずとスプーンをとって、一口たべたら、あとは夢中だった。すっかりたいらげてから、

（そうだ、おれ、家をでてから、なんにもたべていなかったんだ。）

と、気がついた。八時間以上も、空腹をがまんしていたことになる。お腹の皮がつっぱったかわりに、目の皮がたるんできた。

そんな賢太^{けんた}を見て、男は満足そうに、ゆっくりとたばこのけむりをはいた。

窓のむこう、ネオンがまたたきはじめた東京の空を、賢太は、ほんやり見つめていた。なんだか、ひどく不安な気持ちになった。

「おれ、これからどうすればいいんだ。」

目をしょぼしょぼさせて、かたをすくめたかっこうは、「家出^{けだ}」という冒険^{ぼうけん}をやらかした少年のようには見えない。

男が、ふっとわらった。わらうとするどい目つきが消えて、むじやきな子どもっぽい表情になる。

スリだ、なんて、とても信じられない。おりめのおったズボンに、小ぎれいなジャンパーをきていた。

「おまえ、どこからきた？」

男は、やっと話しかけた。やわらかく、くるむようないかただった。すると、賢太は、こわばったからだに、血がとつくとつくと流れはじめるような気分になった。

（この人なら、話してもだいじょうぶだ。）

そんな気がした。

男は、ふたたびきいた。

「ひとりできたのか。」

「ひとりで。」

賢太は、小さい声でいい、下をむいた。

「ふん。故郷^{こきやう}はどこだ。」

「Y村。福島県の。」

「ほう、で？」

え？ と、賢太は顔をあげた。男の、ものといたげな目にぶつかった。やわらかく、微笑をふくんでいるような目だ。賢太は、一気にいった。

「おれ、あの、家出てきたんです。」

男がだまっているの、見ると、ほおづえをついて、窓ごしに街の灯をながめていた。べつに、おどろいているようすでもない。

賢太は、すっと肩のにがおりたような気分になった。それで、なにもかも、さっぱりとしゃべってしまいたくなかった。

賢太はしゃべりはじめた。と、いっても、もともと無口で、そのうえ、口べたなので、どもったり、つかえたりしながら、なのだが。けれど、男は賢太のたどたどしい身の上話を、しんぼう強くきいていた。

「ふん、おまえ、両親がいないのかい。するてえと、孤児じゃないか。ふん、そうか。叔父さんにやしなわれていたのか。」

はじめ、話をひきだすように、あいづちをうっていた男は、賢太が中学一年の三学期は、ほとんど学校にやつてもらえなかった、という話をしたとき、ぶいと顔をそむけた。なぜか、みけんのあたりにしわをよせ、むずかしい表情になった。

賢太は、いっしょうけんめいしゃべった。

二学期までは、とぎれがちながら、どうやら学費をだしてもらえたが、そのうち、叔父は、家業の木細工の仕

事を手つだわせ、

「なあに、学校さ、いぐより、手に職つけといだほうが、なんぼか身のためになるし。」
と、もう学費をだしてくれようとはしなかった。

叔父だつてまづしいのだ。自分の子も、小学生をかしらに三人いる。

賢太の両親は、仙台で民芸品の店をひらいていたのだが、そのころの賢太は、いたずらっ子であかるい性格だった。けれど、小学校に入学した年、父を交通事故でうしない、それから二年後、あまりじょうぶではなかった母が、心臓マヒをおこして、あつけなく死んでしまつてから、無口になり、いつもなにか考えこんでいるようになった。

賢太がひきとられたY村の叔父、といつても、父のほんとうの弟ではなく、とおい縁つづきだった。それでも叔父も叔母も賢太のめんどろをよくみてくれた。けつして、つらくあつたわけではない。

（それなのに、おれは叔母さんのダンスから金を持ちだして、家出をしてしまった。）

考えると、賢太の心はチクリといたむ。しかし、中学にやつてもらえない、ということとはつらかった。

中学で、賢太の成績は常に上位であつた。学校にやつてもらえない叔父の家の生活で、賢太がしきりに思ひだしていたのは、母のことばである。かつて、母は、おさない賢太によくいったものであつた。

「いまに東京へつれていってあげるからね。母さんは江戸っ子なんだよ。いまにお金をためて、東京で勉強させてあげるからね。」

そのことばは、賢太の頭にこびりついている。

母は東京生まれの東京そだちだといつたが、身よりはなかつた。戦争のとき、空襲でその父と弟妹をうしな